

# 3連休 Vol.1

2000.02.11

曇り

## 峰山 & 砥峰 XC スキー

メンバー> 加藤一雄 51 才、大塚賢一 45 才、木倉博 37 才  
福迫順一 36 才、中垣早人 30 才、田中彰 26 才



みんなパフォーマンス

昨今は、ストレス社会であるのでホルモンバランスが崩れてそれを癒すために、アロマテラピーという香りをかいて精神を安定さす療法がはやっている。

この厳冬の峰山では、名もない風の彫刻家が、雪を素材にして大自然に造り出す二度と見られないモチーフの数々、それをひとつひとつに焼き付ければ・・・、エンドルフィン、アドレナリン、ノルアドレナリン、セロトニン、ドーパミンの五つの脳内ホルモンがそれぞれにほどよく調和され誰もが心やすらぐことであろう、そんな素晴らしい世界の中に足を踏み入れている。



防火帯を突き進む

今冬では最大の雪、最多の6人編成でのクロカンスキーと戯れて良き3連休の初日を飾りました。

このたびは、今までの未知のルートのチャレンジすることにした。そ



雪まくりを横に進んでいく

これは夏から秋にかけてはよくMTBで走っている砥峰高原へのルートである。この砥峰高原は今まで行かなかったのは雪が多く付かなければ一面のススキの高原が白銀の世界にならないから様子を伺っていたしだいである。でも、今日は雪がよく積もっているので、期待を込めてチャレンジしてみた。

すると何と、この高原への林道は峰山高原では見られない素晴らしいご褒美に出くわす。

背の高い杉林の大木に雪がびっしりと張り付き昨日の厳しさを伺わせてくれる、それほどにとんでもない吹雪だったのであろうが我々には素晴らしく美しい光景に変えられて瞳の中に飛び込んでくる。

「ワァ～、きれいな～」と、誰からもなく声が・・・。シャッターを切るもの、ビデオを回すもの・・・、みなそれぞれにその素晴らしい光



砥峰道



一列縦隊

景を記録している。

究極は、このすすきが原をMTBのダウンヒルのように、直滑降で滑っていくのである、と言え非常に格好のいいものであるが、すすきが全面に倒れてゲレンデ状態とは相成らず、すすきの中を転びながら滑って行く、と言ったほうが正しいであろう。しかし一度転倒すれば新雪なので起きることに困難極まってとんでもない体力がいるのである。この砥峰高原ではMTBでもスキーでも七転び八起きである。

最後は、やはり暁晴山の山頂まで登ることになったが、ここで何と、MTBチームに出会う。このチームは2年前に氷ノ山の雪山でも出会ったチームである。まあみんなそれぞれにバラエティーにとんだ楽しみかたをしているが、雪山ではMTBは誰かの踏み後しか漕げないのでやっかいだと私は思うのだが・・・、その点このXCスキーは新雪の深雪でもどんと突き進んで行くので、やはりその季節のフィールド

に応じた遊び道具で楽しむのが最適であろう。

今日は、3連休の初日からちょっと頑張りすぎたかなあ、と思うほどに7時間ぶっ通しで身体を動かさっぱなしであった。



ゲレンデ砥峰



コケまくりの早人



MTB チーム



加藤氏の板引っ張り??



藤無山を背負って

## 3連休 Vol.2

2000.02.12

晴れ

### 藤無山ワカン登山

メンバー> 大塚賢一 45 才、木倉博 37 才、福迫順一 36 才

昨日に引き続き今日も雪山に来ている。標高1000m足らずのピークであるが、ここから見る360度のパノラマは、真っ白な偉大な氷ノ山から三の丸、鉢伏高原、そして綿帽子をつけたまわり一面の山並みはモノトーン調の水彩画のようである。

スカイブルーの空が味方してくれて気温2度にもかかわらず、そよ風がほどよく暖まったからだに気持ちのいい感触である。ここでのラーメンタイムは格別にうまいものである。最近鍋焼きうどんを持参してきてるが、どこの高級料亭にも負けないうまさがある。

今日の天候は昨日よりも晴れマークが大きいので、昨日の全メンバーに声をかけるが、それぞれに用事もあり、この3人のメンバーになったしだいである。しかし結果から言うと、昨日より今日のほうが断然にスリルもあり天候もよく、とんでもない体力を要したものである。また、ゲレンデ遊びのおまけもあり17時には帰宅しているので、スポーツジムでのケアも出来てこのプログラムはこの上なしのである。

山スキー装備で、大屋スキー場の始発リフト8時に乗りワカンを履



大変な急登のラッセルワカン

き一路樹林帯に姿を消していく。木倉妻と子供はゲレンデでスキー遊びをしているので、12時には下山の計画をする。

あと1ヶ月もすれば山スキーシーズンに入るのでツアーブーツにもなれていなければと思い、3人ともツアーブーツでのワカン装備である。

福迫氏は今シーズンから山スキーを始めるので新品のノルディカTR12である。それに何と、ショートスキーまでをザックに固定している、ほどよく気合いが入っているのが伺える。

我々2人はこの新雪の深雪では全然に歯が立たないのでとりあえずスキー板はリフト最終地点にデポである。

1月2日に来た時よりとんでもない大雪で膝までのラッセルワカンである。ノートレースなので順次先頭交代をしながら進んでいくが、少しルートを外れれば腰まで踏み抜いてしまうので大変である。

第一ピークにたどり着くともう大汗である。ここからのルートが非常にわかりにくいので1月2日に来た時に入念に頭にたたき込んだつもりであったのだが・・・、やはりトラバース地点を少し外れてしまい、杉林の中を右往左往してしまい、地図をみても現時点が何処なのかさっぱりわからなくなってしまい、コンパスを見るとなんと逆方向に進んでいるではないか!、『おかしい、ストップ!、ルート間違えてるわ!』、「福迫さん、その開けた所を登って確認とってみて!」と言うと「我々が来たトレースの後がある!」と・・・、な、な、なんと、トラバースをしたつもりがぐるっと回って来てるのだ。

あわてずに冷静に!、と心のリセットボタンを押す。深呼吸して自分自身に「おちつけ!」と、いい聞かす。そうすれば現時点もわかってきてトラバース地点もはっきりと確認がとれてきた。ここで迷うこと50分である。それも胸までのラッセルあり、ブッシュ帯で前進不可能、腰までの踏み抜き多数と大変な労力を要したものである。

この前に来た時にもしここで迷えば稜線に出れば安心と思っていたのが大変な間違いであった。

第二ピークにたどり着くまでには、とんでもない急斜面の直登なので四つん這いになって雪の斜面をよじ登らねばならないところが多数あったので大変であった。しかし、この第二ピークにたどり着くと、藤無山のピークが見えてきてもう3ピッチでたどり着くのであるが・・・。

第三ピークにたどり着くと、時間も11時前なので、ここで昼食を



ショートスキーを操る福迫氏

とってピストンすることに決定する。

下山は来たルート(下り斜面)を引き返せばいいのだから楽勝であるが、ここでなんと福迫氏が今まで背負っていたショートスキーを履いて滑って降りるといって、とんでもない急斜面の新雪の深雪をトップを浮かし気味にして見事にせまい杉林の中を縫うようにしてあれよあれよと滑っていくではないか!・・・さすがに北の大地北海道生まれの一級の腕前だけのことはある。

しかしショートスキーの行動力はすごいも

のである、これが臨機応変した山々を滑る山スキーに肩を並べられれば・・・軽い、短い、扱いやすいの3拍子なのだが、北アルプスのとんでもないでかいスケールに対応出来るかどうかは疑問である。問題はシール及びスキーアイゼンをどうやって着けるかであろう。

12時過ぎにはリフト最終地点に戻る。藤無山のピークは踏めなかったものの非常にいい経験をさせてもらった。

早速今シーズン初のゲレンデ滑りを楽しむことにする。この大屋スキー場は2時間券、3時間券と我々にはちょうどいい時間で格安の2000円である。

ショートスキーに少し興味がわいていたので、福迫氏のを借りて滑ったが面白いようにスナップが効き思っていた以上に楽勝に滑れて楽しむことができた。

次回は最大のパーティーで是非ともピークを踏みたいものだ。



元気一杯のスタート

# 3連休 Vol.3

2000.02.13

晴れ / 曇り

## トライアルバイク... 加古川長池周辺の山

メンバー>尾川洋一 46 才、大塚賢一 45 才、谷田安輝 45 才、木倉博 37 才



みんなで...



フロントホップで責める谷田氏だが...



ぶっ飛ぶ谷田氏



果敢に責める木倉氏だが



ドテッ、木倉氏

今日は北部の天気は寒気がなだれ込むため今ひとつなので、町うちでの遊びにする。と言ってもトライアルバイクで低山に入るのでこれも全身の筋肉を使うのでいいトレーニングになるのである。

フィールドに対しては私は少し物足りなさがあるが、谷田氏がまだ足の故障のために優しいところを選んだのである。

木倉氏にとってはそのほうがよかったのではないだろうか？、しかし彼も今や谷田氏の前の単車であるベータゼロに乗り換えてからは、以前のTYRにまたがっていたようなぶざまな光景を見せなくなってきたのには感心である。しかし少し急なダウンヒルになると相当にびびりが入ってしまい、押して降りてくるのにはおどろきである。このほうがはるかに危ないであろうに...

ハプニングと言え、またまた谷田氏が派手なパフォーマンスを見せてくれて単車に嫌われて自分は3回転ほどしてヘルメット



乗れている、尾川氏

がコンコンと岩にぶつかり大コケしてしまった。その時にまたまた直りきっていない足を肉離れしてしまい散々な結果になってしまった。また1ヶ月は直るのにかかるであろう。せっかく大阪から乗りに来ているのにツイてないことである。早く完治して今度は生野の段が峰にでもくり出そう。

『朝日が登るから 起きるんじゃなくて  
目覚める時だから 旅をする  
教えられるものに 別れを告げて  
届かないものを 身近に感じて  
越えて行け そこを  
越えて行け それを  
今はまだ 人生を 人生を語らず』